

「お兄ちゃん、何かお魚釣れた？海は危ないから、気をつけて楽しんでね。」

そう話しかけてくれたのは、八十才くらいの少し腰の曲がったおばあさんだった。

僕はある日、家族で釣りに出かけた。行き先は、高いビルが一つもない、きれいな海に囲まれたのどかな田舎町。駐車場には、白髪のおじいさんがいて、僕達を案内してくれた。

堤防には、きれいにゴミを掃除してくれている優しそうなおばあさん。

いつもは、大好きな釣りに夢中になる僕だけど、ふと、この町はご老人が多く、どのようにして町を運営しているのだろうと思った。

町並みを見渡すと、僕達が毎日あたり前のように行く大型スーパー、コンビニエンスストア、ドラッグストアなどは見当たらない。

歩道を見ると、手押し車でゆっくり歩いているおばあさん。どうやって買い物に行っているのかな。もし、どこか具合が悪くなったら大丈夫なのかと心配になった。そして、僕の頭に浮かんだのは「ふるさと納税」という言葉だった。

「ふるさと納税」とは、生まれたふるさとや応援したい自治体に寄付ができる制度である。寄付金のうち二千円を超える部分は、僕達が住んでいる地域の住民税の減額や所得税の払い戻しが受けられる。そして寄付額の約三割がお礼の品として地域の名産品などがいただけるという仕組みである。

今までは、家族で話し合っ、父の生まれ育ったふるさとに寄付したり、正直、返礼品という視点から寄付したこともあった。でも僕は、釣りの帰りの車の中で「お父さん、僕この町に寄付したい。」すると父は「わかった。まずは自分なりにこの町について色々知る必要があるね。」と言った。その日から僕は、自主的にその町について良い所、そうでない所も知るようになった。そうしているうちに「その町を応援したい」という思いが積み重なった。返礼品など関係ない。ただ少しでも、優しく親切にしてくれたおじいさん、おばあさんが安心して暮らしてほしいという思いからだ。

この小さな町から、今の日本の現状が芽づる式に出てくる。最近のニュースでは、地方の過疎化により、バスの運行を減らしたり、離島においては、人口が減る一方で、本土との定期便を減らさざるを得ない現状だという。

高齢化、少子化、消費税が使われなければならない分野にきちんと届いているのか。今の自分は、色々な人に守られているが、大人になった自分は、そうはいかない。どの分野で貢献できるのか視野に入れながら学んでいきたいと思った。「ふるさと納税」の利用者は、未だ納税者の約二割にとどまっている。

もっと利用者が増えれば、小さな町から明かりが灯って「明るい日本」に一步一步近づくのではないのでしょうか。